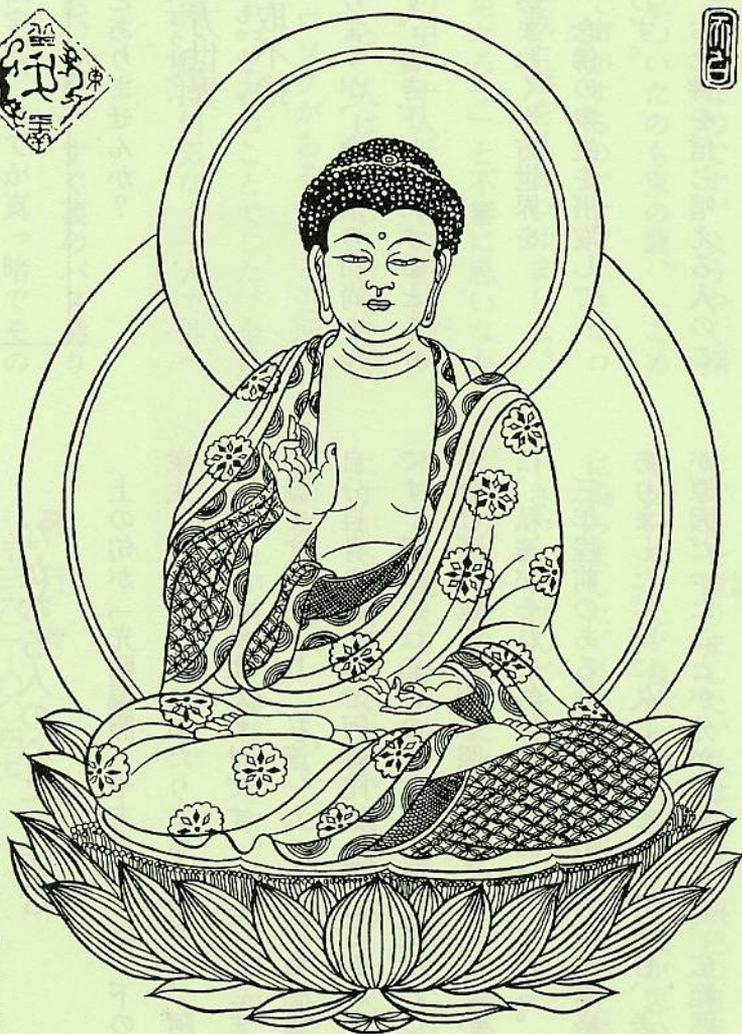


みおしえ



月影（つきかげ）

市川陽山謹字

釈迦如来

月影（つきかげ）

こんなお経を聞かれたことありませんか？

光明徧照

十方世界

念佛衆生

攝取不捨

仏教は漢字が多いのが困りますが、浄土宗の和尚さん達がとてよく使うお経です。書き下し文にするとこうなります。

（阿弥陀様の）光明は、あまねく十方世界を

照らして、念佛の衆生を攝取して

捨てたまわず。

いつでも、どこにいても、お念佛を信じ唱える人のことは、阿弥陀様の身と心から発する光が照らして下さっている。いわば見ていて下さっている。そして誰一人として捨てることなく救って下さると言う意味です。書き下し文にしても堅苦しいですが、法然上人が親しみやす

い和歌にして残して下さっています。それが「月影」の御歌です。

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ

上の句が「光明徧照 十方世界」に、下の句が「念佛衆生 攝取不捨」にあたります。つまり、阿弥陀様の光明を月の光に例えたわけです。でも、ここまでは頭の中の話です。何より、私達一人一人が、お念佛を通じて、自分自身の心と体で阿弥陀様を感じるということが大事です。難しくは無いです。阿弥陀様はいつも、月の光が分け隔て無く私達を照らすように、見ていて下さるのに、私達がそれに気付かないだけです。

三年程前のある秋の晩、私の住む街で本格的な停電がありました。実に久しぶりでした。翌日、送電所の事故が原因だったことが分かりましたが、広範囲に渡って長時間完全に電気が止まりました。電気のある明るい夜が当然であった私にはショックでした。大人でも動揺したのですから、幼い我が子の受けた衝撃はひどいものでした。非常用の懐中電灯を顔の前で上向きに握りしめたま

ま離しません。

明るいのは本人の顔だけです。でも、暗闇に浮かぶ子供の表情を見ると、とても取り上げることは出来ませんでした。あたかも、大海に漂う一片の木切れにすがる漂流者のように、それはそれは必死なのです。ようやく探し出したロウソクの灯に一息ついたのも束の間、「ごめん下さい」と、今度は玄関で声がするのです。小さなロウソクの灯を前に、私は家族と顔を見合わせました。

「こんな時に一体誰が何の用だろう」と不審に思いながらも玄関を開けると、暗夜の中、十人近くもの影法師が立っていました。理由を聞くと、人は皆同じことを考えるようで、お寺に行けばロウソクがあるはずと近所の方々が偶然、寺の門前に集まったとのことでした。全員にロウソクを渡し終わった後、私は何気なく一人で外へ出てみる気になりました。

お寺の周辺一帯の家々の窓、玄関、すぐ裏のバス通りの商店街、街路灯に信号機まで、全てが真っ暗でその上、一台の車も通りません。静まり返った暗夜の街にこれが真の夜の闇なのかも知れないなどと考えながら、ふと自分の足元を見てみると、息を飲みました。暗いはず

の地面に、私の影がくっきりと映っていたのです。思わず天を仰ぐと、いつ雲が切れたのか、夜空には煌々とした満月がありました。もう一度辺りを見回すと、さっきまでの暗夜が嘘のように街全体が銀色に輝いているのです。目を睜みはりました。私は全身で銀色の日光浴をしています。気分でした。自然と「月影」の御歌が思い出され、胸に染みしました。私の知らない所で、阿弥陀様が見ている下さっていたんだと感じました。

限りある命の私達には、確かな支えが必要です。電気や吹けば消えるロウソクに頼る人の姿は、不確かなものにすぎない私自身の姿です、暗夜を照らす天の月のように絶対変わらない、いつもそこにある支えが必要なのです。それが阿弥陀様なのです。私達人間が、それに気付かないだけなんですよ。

発行者

〒三六二一〇〇四七

埼玉県上尾市今泉一五六 十連寺内

『みおしえ』編集室 代表 宇高 康哲

